

日本労働年鑑 第28集 1956年版
The Labour Year Book of Japan 1956

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第五章 農村青年運動

第一節 国際農村青年集会をめぐる動き

国際的反響

一九五三年一二月六日イタリアのセントアルベルト・ラベナ地方の農村青年が発表したアピール「国際農村青年会議のための全世界の青年諸君に訴える」については、本年鑑(第二七集六三—四一五ページ)で記述したが、この訴えは全世界の農村に大きな反響をよびおこした。たとえばイタリアでは同年末、農村青年農業技術者、教育者、スポーツ団体、文化団体等の代表者によって国際農村青年集会世話人会が構成され、この世話人会は五四年四月デンマークで開かれた国際青年会議第一回国際準備会のために大きな努力を払った。イタリア国内では全国十数カ所で農村青年の集会が開かれ、四月には全国的な集会が持たれた。

またインドでは全インド農民組合書記長プラヤダラス氏とアンドラ地方農業労働者連盟委員長モハマダラス氏の連名で青年会議支持の声明が発せられ、カラチ民主学生連合会も同一趣旨の声明を出した。南米グアテマラの労働総連合農民部や、国連学生連盟書記長A・ラウフカン氏等も賛意を表明した。

つぎに四月四日のデンマークにおける準備会の模様を略記しよう。当日ウエンディング・ヴィレジの農業大学に各国農村青年代表が国際青年会議の準備打合せのため集合した。わが国からは全日本青年婦人会議の山口健二氏、日本文化人会議の芳野圭氏が出席した。この準備会では正式の国際会議を本年一二月に開くことに決定、また「土地、仕事と適当な賃銀の保証、税金、地代の減額、農業労働条件の改善、職業教育の達成、十分な休息、スポーツへの参加、民主的権利の確保、および平和とみなさんの国の独立のために、国際農村青年集会の準備のために団結しよう」との声明書を発表した。この声明はまた、各国農村青年が代表をえらび、集会に代表を送るよう努力されたいと訴えた。

日本における準備活動

わが国の第一回打合会は、五四年三月一八日衆議院議員会館で開かれた。参加団体は、日本青年団協議会(日青協、日農両派青年部、日教組青年部婦人部、電産、社会党左派青年部、日本民主青年団、世界民主青年連盟日本支部、日本文化人会議、全日本青年婦人会議、日中友好協会等で、オブザーバーとして全購連労組、新生活協会等が出席した。この第一回打合会で決定された主要な事項は、(一)青年集会の趣旨を各組織を通じて徹底させ、自主的な運動としてもりあげること、(二)五月の日青協全国大会後に全国的な準備会を開くこと等である。

第二回打合会は六月九日衆議院議員会館にひらかれ、出席団体は日青協、日農統一派青年部、日教組青年部、総評、農林省全改良労組、全電線、日本民主青年団、社会主義青年連盟、東京農大自治会等、このほか日農主体性派がオブザーバーとして出席した。ここでは、(一)現在各地で動いている集会への動きを更に拡大し、七月より三ヵ月各地で農村青年の集合をひらくこと、(二)各地方の動きを全国的に結集し、農村青年の諸要求とそれを実現する団結の方向を導きだす日本農村青年集会を開くこと、等が決定された。

その後青年集会をめぐる各地方農村青年の活動は活潑となり、特に東北、北関東、山陰のような後進的な地方でさかんに集会が開かれ、そこには日農両派の青年活動家や青年団員、婦人会員とが統一的な目標のもとに共同的に活動し、都市農村の労働者もこれを援助した。

第三回準備会は九月二四日衆議院会議室で開かれ、前記諸団体より更に広い組織、階層を代表して七〇数名が出席し、各地の様子が報告された。その報告によると、この運動が各地各部落で種々な形で発展しつつあること、とくに青年婦人の文化的要求をとりあげてゆくと、広汎な青年がこの運動に参加してくること、またこの中で労農学青年の結びつきが強まってきたこと、労働青年の積極的援助が大きな貢献をしていること等が明らかにされた。以下各地の準備活動の主要なものを摘記しよう。

(一)宮城 東北大会を前にして、国鉄、全建労、全統計、社会党両派青年部、日農両派青年部などで準備会をひらき、県内九カ所で地区準備会をひらいた。県大会は八月二六日仙台市で四〇〇名の参加者を得て開かれた。

(二)山形 六月県教組中心に会合がひらかれ、ついで八月一九、二〇日県集会がもたれた。県労働組合評議会も積極的にこの運動を援助した。村では青年団、4Hクラブ、婦人会、青年学級、教組代表などが集まり、託児所、嫁と姑の問題、農作業の問題等日常卑近の諸問題につき話し合いが行われた。

(三)茨城 東茨城郡では零細農の次三男が土地を求めて集会をひらき、未墾地解放、開拓につき協議し、郡南一町三カ村の未墾地開墾に成功した。

(四)東北地方 八月二八、九日青森県弘前市で各県代表六百数名出席のもとに東北農村青年集会が開かれた。これには東北以外の北海道、九州の農村労働青年も出席した。会議は、生活改善、平和問題、農村文化問題、次三男対策、再軍備、教育問題から恋愛スポーツの問題まで提出されて自由に討論が交わされた。当日の結論は、(1)農村青年の苦しみは共通したもので、ラヴェンナの青年の要求は東北青年の要求と一致している。(2)さらに農村青年の力を結集せねばならぬ。

(五)長野 一一月八日北安曇郡では第二回準備会を開き、青年団、農協青年部、日農青年部などのほかに、昭電、国鉄、市職、東電等の労組青年も出席し話し合い、下伊那郡では一一月九日飯田公民館の集会に四百人が出席、農民の日常経済問題や青年婦人問題をとりあげ活潑に論議され、日本農村青年集会には三〇名以上の代表を送ることを決議した(「農民新聞」一三二号)。

(六)茨城 一一月一四日水戸市において「農村青年男女の集い」がひらかれ、各町村青年団、常東総協議会、日農常総同盟、河北農民同盟、未墾地解放同盟などの外、日立製作所、国鉄、教組、全専売等の労組青年約三四〇名が出席し、六つの分科会で未墾地解放、農協民主化、農業技術等について話し合い、今後は各農民団体、労組が統一行動をとって国際農村青年集会への代表派遣、日常闘争等に努力しようと申合わせた。

日本労働年鑑 第28集 1956年版

発行 1955年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2002年3月5日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1956年版(第28集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
